

日本無責任警察

竹村直久

登場人物

赤岩哲夫 (42) 主任刑事  
館川広樹 (37) 刑事  
峰野将太 (35) 刑事  
狩山茂 (36) 刑事  
松原誠一 (27) 新人刑事  
下谷登 (29) 殺人犯

舞台は警察署内にある捜査課の一室である。

上手に入り口のドアがあり、応対用のカウンターがある。中央に事務用のスチールデスクが4台向かい合う用に置かれている。

デスクの上に電話機がある。

下手の壁を背に室内に向かって主任用の両袖デスクがある。

部屋の隅にロッカーや掃除用具入れがある。

壁掛け時計があり、現在4時40分頃を差している。

下手の主任用デスクに赤岩がいる。短く刈り込んだ角刈り頭に黒いサングラスをしている。

中央に向かい合うデスクに館川、峰野、狩山の3人。それぞれ新聞を読んだり携帯をいじったりして暇を待て余している。

上手の入り口から勢い良く松原が入って来る。

松原「初めまして、八曲署から赴任して来ました、松原誠一です」

峰野「(立ち)お、いらっしやい！ いや、よく来てくれたねえ、

待ってたんだよ君のこと」

他の刑事たちも立ち上がり、嬉しそうに近寄って来る。

松原「は、ありがとうございます。皆さん新人ですが一生懸命やりますので、宜しく願います」

赤岩「(前へ出て)自分が団長の赤岩だ」

松原「はい、お噂はかねがね伺っております、僕はこの署に赴任することが出来て……」

赤岩「(遮り)そんなことはどうでもいい、おいゾウサン！」

狩山「はいっ」

と狩山が前に出る（狩山の股間は異様に大きく縦長にモッコリと膨らんでいる）。

赤岩「ポケッとしてねえで角屋に予約の電話を入れるんだ」

狩山「は、はい（と電話をかける）」

赤岩「いいか、ママに煮込みと締め雑炊を忘れねえ様に伝えるんだぞ、分かったか！」

狩山「は、はい」

峰野「（松原に）いやあね、今日は君が赴任して来るといって歓迎会を開こうと思ってね、皆で張り切ってたんだよ」

松原「はあ、ありがとうございます。僕は、小さい頃から刑事ドラマに憧れて、それで福井県の警察学校を出まして……」

館川「そんなことはどうでもいい」

館川がスッと松原に近寄って来る。

峰野「コブラさん」

松原「（緊張し）こ、コブラ？」

館川は松原に近付くと、無言で睨みながら松原の周りをグルリと歩く。

威圧的な雰囲気圧倒され、緊張する松原。

館川「おい」

松原「は、はい」

館川「俺は館川ってんだ」

松原「あ、あなたがあの、館川さんですか、お噂は伺っています。射撃の腕やバイクの運転も右に出る者はいないって……」

館川「そんなことはどうでもいい」

松原「は、はい」

館川「俺は通称コブラだ。覚えておけよ」

松原「はっ、はい、はい」

舘川「それからなあ（と狩山の肩をつかみ）こいつは狩山、通称  
ゾウサンだ」

松原「ゾウサン……」

狩山「（誇らしげに股間を突き出し）おう、宜しくな」

舘川「（峰野を指し）こいつは峰野、通称ツチノコだ」

松原「つ、ツチノコさん。宜しくお願ひします」

峰野「ああ、こちらこそ宜しくねっ」

舘川「そして我等が団長、赤岩主任刑事は、通称赤さんだ」

赤岩「おう」

松原「よ、宜しくお願ひします」

舘川「よし、それじゃ早速だが松原」

松原「はいっ」

舘川「ちょっと顔を貸せ（とドアに向けて顔を振って見せる）」

松原「は、何でしょうか」

舘川「連れションだ」

松原「？」

舘川に連れられてドアを出て行く松原。

赤岩「おいツチノコ！」

峰野「はい」

赤岩「ゾウサン」

狩山「はい！」

赤岩「てめえら5時になったらすぐ角屋へ急行出来るよう、今の  
うちから掃除を終わらせておくんだ」

峰野「はいっ」

狩山「了解しました」

二人は隅のロッカーから掃除用具を取り出し、セツ

セとデスクを拭いたり床を掃いたりする。

松原を連れて舘川が戻って来る。

館川「赤さん、コイツのニックネームが決まりました」  
赤岩「何だ」  
館川「ポッキーです」  
松原「……」

掃除していた峰野と狩山が拍手する。

赤岩「よし、今日からお前はポッキーだ。しっかりやってくれよ」  
峰野「ポッキー！」  
狩山「よろしくなポッキー！」  
松原「……」

ニコニコしている一同。

ひとり浮かない顔の松原。

松原「あ、あの、赤岩さん」

赤岩「なんだポッキー、自分のことは赤さんと呼んでくれ」

松原「は、はい……」

赤岩「どうした、何でも言ってみろ、今日からお前も、赤岩軍団の一員だ」

松原「は、はい、あの、みなさんコブラさんとか、ツチノコさんとか……そんなあだ名なのに、赤岩さんだけは、何故自分の名前の赤を取って、赤さんなんて、ちょっと、ずるいんじゃないかと思って……」

赤岩「(笑) ふん、なあんだ。そんなことか……だがなお前、自分が赤さんと呼ばれてるのは、赤岩と言う名前だからじゃねえぞ」

松原「えっ、それじゃ、どうということなんですか」  
赤岩「おう」

赤岩は客席に背を向けて松原と並んで立ち、「こそ」とそと股間のチャックを下ろして松原にイチモツを見

せる。

松原「ああっ！こ、コレは！あ、赤……」

赤岩「（しまい）分かったか」

松原「あ、赤さん……」

赤岩「ポッキー」

掃除を終わらせて掃除用具をしまっている狩山と峰野。

狩山「赤さん」

赤岩「なんだ」

狩山「掃除は終わりました」

赤岩「よし（腕時計を見て）くっそう、あと12分もありやがる。おい teme じゃ、ポケットとしてねえで今すぐ署内を回り、時計を全部10分ずつ進めてくるんだ。分かったか！」

舘川「了解」  
峰野「了解」  
狩山「了解」

と三人小走りに出て行く。  
壁に掛かっている時計を外し、針を10分進める赤岩。

赤岩「あんなポッキー」

松原「……」

赤岩「ポッキー！」

松原「は、はい……」

赤岩「これから俺たちが行く角屋って居酒屋はなあ、こじんまりして古風な店なんだが、ママの作る料理がバツグンなんだ。それに全国津々浦々から独自のルートで取り寄せた地酒が豊富に取り揃えてある。それがまた格別で、それに煮込み

が終わった後の仕上げの雑炊が……うつつ、くそう考えた  
だけでも堪らなくなってくるぜ」

上手のドアから下谷登がヨロヨロと入って来る。

松原「(気付き) あ、何でしょうか」

俯いたまま佇んでいる下谷。

不審に思い、近付く松原。

松原「あの、もしもし、何か「用でしょうか?」

下谷「あ、あのう、あのう……僕は……僕は……人を殺してしま  
ったんですう……う……う……」

と泣き崩れる。

松原「なんですって、本当ですか!」

下谷「は、はい、本当です、僕は……僕は……」

松原「それで、自首して来たっていうんですか?」

下谷「はい、すみません。すみません」

険しい顔をして近寄って来る赤岩。

赤岩「どけポッキー」

と松原を退かし、泣き崩れる下谷の前にしゃがみ、  
肩に手をかける。

赤岩「そうか、それでお前、自分で罪を償おうと思って、自分か  
ら自首して来てくれたって訳だな」

下谷「は……はい」

赤岩「辛かったろう、よく来てくれた。だがなあ、悪いんだが、

今日はもう係りの人が帰っちゃったんだ。悪いけど、また明日来てくれるかな」

下谷「……」

署内の時計を進めに行っていた舘川、峰野、狩山が戻って来る。

舘川「バッチリですよ赤さん」

峰野「いや、もう待ちきれませんね、早く行きましょうよ」

狩山「あ、もうあと2分ですよ」

赤岩「（立ち上がり）よし、じゃ行くか」

一同「はいっ！」

誰も下谷のことは目に入らない様にドカドカと出て行くこうとする。

松原「ち、ちよっと、ちよっとちよっと」

赤岩「ん？ どうした？ 早く行くこうぜ、絶品の煮込みと雑炊が待ってるぜ」

峰野「幻の地酒も揃ってるし」

赤岩「（涎を拭く）ズズツ……さあ、レッツゴーだ」

松原「ちよっと、ちよっと」

舘川「んだよもう、世話の焼けるヤツだな、おいゾウサン」

狩山「はいっ」

舘川と狩山は松原の両腕を持ち、一緒に連れて行くこうとする。

呆気にとられていた下谷が立ちがる。

下谷「ち、ちよっと！ ちよっと！」

舘川「（立ち止まり）ん？ 赤さん何ですかこいつは」

赤岩「気にしなくていい、さあ行くぞ」

下谷「まっ、待てよこのやろぅー！」

と赤岩たちを引き戻し、ドアの前に立ちふさがる。

赤岩「何だ？」

下谷「ふっ、ふざけるなこのやろぅー！」

驚いて見る一同。

峰野「赤さん。どういうことなんですか」

赤岩「うん、コイツはたった今、人を殺したと言って自首して来たんだ」

峰野「なんですって、本当ですかそれは」

赤岩「ああ」

舘川「そんな団長、今から取調べと調書を作ってたんじゃ、今夜中に署を出ることは不可能です」

赤岩「うん。分かってる」

狩山「どうしてまた、こんな時に」

赤岩「心配するな、また明日来て貰うことになっている。なっ」

狩山「じゃあ行きましよう」

赤岩「おう」

と下谷をどかして行くこうとする。

下谷「おい！ おいっ！（とつかみかかり）ちょっと待てよこら

あー僕を逮捕しろよお前らー！」

赤岩「断るー！」

下谷「お前等それでも警察かー！」

バツと一斉に警官バッジを出して下谷に見せる赤岩と舘川と峰野と狩山。

下谷「……」

下谷は懐から拳銃を出し、一同に向ける。

赤岩「（ビビって）危ない！ やめろ」

下谷「（震えている）お前ら……お前ら……責任者は誰だ！」

赤岩「（松原を指差し）こいつだ」

松原「何言ってるんですか」

こう着状態になる下谷と赤岩たち。

館川「……ど、どうしましょう赤さん」

赤岩「ようし、こうなったら仕方がない、手分けするんだ。いいかポッキー、ここはお前に任せる、頼んだぞ」

と松原を残して行こうとする。

松原「何処に行くんですか！」

赤岩「お前の歓迎会だ」

下谷「ふざけるなあー」

バキユンバキユンと銃を乱射する下谷。  
慌てふためいて身を伏せる一同。

赤岩「大変だ、110番しろ！」

下谷「殺してやる！ 殺してやるうー！」

と拳銃を撃ちまくる。

館川「お、おい、分かった、お前、いいから落ち着け、な、落ち着くんだ」

と下谷を宥める。

下谷「（荒い息）いいか、僕は今日必ず逮捕して貰うからな」

館川「うん、そうか、分かった」

下谷「僕がどんな覚悟で自首して来たと思ってるんだ。それを、

それをアンタたちは」

赤岩「（両手を上げ）悪かった。ごめんなさい」

下谷「……おい」

赤岩「は、はいっ」

下谷「お前ら、ちょっとそこに並べ」

赤岩「はい？」

下谷「いいからそこに並べよっ！」

と下谷に拳銃で煽られ、手を上げて並ばされる赤岩たち。

デスクの電話が鳴る。

沈黙する一同。

なり続けるベル。

下谷「おい、誰か電話に出ろ、だが余計なこととは言うなよ」

峰野「よ、よし分かった、いいか、出るからな」

とデスクの受話器を取る。

峰野「はいもしもし無責任係……はい、はい……」

受話器を手で抑え、顔を上げる峰野。

峰野「赤さん」

赤岩「何だ」

峰野「角屋のママからです」

赤岩「用件は」

峰野「今日の煮込みは、宮崎県産のモツと卵黄が手に入ったので、  
今までにない絶品が出来たということです」

赤岩「ズズツ（よだれを拭く）くっそーう！ テメエ、早く帰れ  
！」

峰野「そ、それから」

赤岩「何だ！」

峰野「それが……今お店に、モーターショーから流れたキャンペ  
ーンガールの人たちが、打ち上げにみえているそうです」

赤岩「なにっ」

峰野「それが、男の数が足りないって、大騒ぎになっていると言  
うんです」

赤岩「……そ、それは、ハイレグなのか？」

峰野「いえ、それが……」

赤岩「何だ！」

峰野「全員、ティーバックだそうです」

赤岩「うおお……」

前屈みになって股間を押さえる赤岩たち。

赤岩「（下谷に）おい、お前、一緒に行こう」

下谷「ふざけるなー僕は、人を殺して、逮捕して貰う為に来たん  
じゃないか、どんなに必死の思いだったのか、アンタたち  
には何故分からないんだあー！」

赤岩「人を殺したくらいがなんだ」

下谷「ふざけるなあー！」

バキyunバキyunと銃を乱射する。

慌てて隠れる赤岩たち。

赤岩「わ、分かった、分かったからもう騒ぐな、なっ」

下谷「本当か？ 本当に分かったのか」

赤岩「ああ、約束だ。必ずお前を逮捕してやる、明日」

下谷「明日じゃないっ！ もう僕には、明日なんてないじゃないか、明日なんて、明日なんて、もう僕には……僕にはもうないんだあ……うっうっ……」

と泣き崩れてへたり込んでしまう。  
様子を伺い、顔を見合わせる赤岩たち。

赤岩「（小声で）おい……おいゾウサン」

狩山「は、はい？」

赤岩「（狩山に行け、行けという風に顔を振る）」

狩山「（え？ 俺？ 俺がですか？ というように自分を指差す）」

赤岩「（ウンウンと頷く）」

泣き崩れている下谷に恐る恐る近付いていく狩山。  
下谷の側にそっとしゃがむ。

狩山「お、おい、きみ……」

下谷「……」

狩山「……さぞ辛かったろうなあ。分かるぞ、俺には」

と下谷の肩に手をかける。

下谷「……」

狩山「でもよく勇気を出して、自首して来てくれたな。ありがとうよ」

下谷「うっ……うっ……（泣いている）」

狩山「だけど、本当にきみは、人を殺したりしたのか？」

下谷「……僕は……僕は……本当に人を、アイツを、撃ち殺してしまっただんです、この手で、この拳銃で、アイツを、アイツのことを……（泣く）」

狩山「そうか、そりゃさぞ憎かったんだろうなあ、君としてはどうしても許せなかったんだろうなあ」

下谷 「アイツは、僕の友達だったクセに、僕から、かけがえのない恋人を奪ったんだ。僕のことを馬鹿にして……」

狩山 「そうか、恋人を奪われたのか、それは殺したくなる程許せなかった君の気持ちも分かるぞ。同情するよ」

下谷 「（泣く）ウツウツ……」

狩山 「きみ、名前は何ていうんだ」

下谷 「下谷です……」

狩山 「そうか、解ったよ下谷、すまなかった。俺たちは、自分たちが警察官であるということを忘れていた。それを、君のお陰で、思い出すことが出来たんだ。ありがとうな、きみのお陰だ。今日は本当に、よく来てくれたね」

と下谷の肩を揺さぶる。

狩山 「俺たち一同、これからは心を入れ替えて、市民の為に死力を尽くして頑張るつもりだ、ねえ赤さん」

赤岩 「そうだ」

館川 「そのとおりだ、なあツチノコ」

峰野 「はいっ（と頷く）」

狩山 「よかった、本当によかった（と涙を拭い）下谷、よく自首して来てくれたなっ……」

下谷 「す、すみませんでした（泣く）うっ、うっ、うっ、ううううっ……」

赤岩 「お前はまだ若い、これからまだ幾らでもやり直しがきくじやないか、なっ」

下谷 「（泣きながら頷く）」

赤岩 「よし、これからまた新しい人生に向かって出直した。分かっただな」

下谷 「はい……」

赤岩 「それじゃ、また明日出直してくるんだ」

下谷 「ふざけるなー！」

激怒して銃を撃ちまくる。

仰天して身を隠す一同。

館川「落ち着けっ、お、落ち着けてお前、分かった、話を聞いてやるから、何でも言ってみろって」

峰野「（隠れながら）ねえ、ねえだけど君、なんでそいつは、君から恋人を奪うことが出来たんだい？ 彼女はどっして君よりもそいつを選んできましたんだい？」

下谷「そんなこと、言える訳がないじゃないか」

峰野「だけどね君、そこが一番肝心なところじゃないかな、動機がハッキリしなけりゃ、君が本当に犯人なのかどうかも分からないじゃないか」

下谷「えっ？ そうなんですか」

館川「当たり前だ」

赤岩「よし、それが言えないというのなら、もう一度家に帰って考え直して来るんだ」

下谷「分かりました。言いますから。逮捕して下さい……もう僕は、どんなに辛くっても、言いますから……」

隠れながらも赤岩はしきりに腕時計を見てそわそわしている。

下谷「だけど、ねえ皆さん……男の価値は、何処で決まるのですよっか……」

館川「なんだよ急に」

峰野「男の価値って、そんな急に言われてもねえ」

館川「難しいよなあ」

下谷「聞いて下さい、信じられますか……僕の恋人は、僕の恋人は、アイツの方が、アイツの方が僕より性器が大きいからって、僕を捨ててアイツの二つを選んだんです」

峰野「え？」

館川「は？」

下谷 「ねえ、そんなの酷いと思いませんか、僕よりも、性器が大きいからって……ねえ皆さん。男の価値ってのは、性器の大ききで決まるものなんでしょうか」

峰野 「せいき？」

館川 「せいきって、性器か？」

赤岩 「おい下谷、もしかしてその性器ってのは、チンコのことか」

下谷 「アイツは馬鹿にしたんだ。アイツは……アイツは……僕よ

り性器が大きいからって、僕のことを馬鹿にして、僕から

恋人を奪いやがったんだあゝちくしょう……ちくしょうー！」

と床を殴って泣く。

赤岩 「下谷」

下谷 「……」

赤岩 「下谷」

下谷 「……なんです」

赤岩 「……いいか下谷、ちょっとお前に見せたい物がある」

下谷 「何です？」

赤岩 「おいポッキー」

松原 「はい？」

赤岩 「……見せてやれ」

松原 「何をですか」

赤岩 「分かってるだろう」

松原 「え？ でも何で」

赤岩 「何でもくそもない、さっさと見せるんだ」

松原 「嫌ですよ」

赤岩 「何、上司の命令が聞けねえのか、テメエそれでも刑事か！」

松原 「……」

赤岩 「おい下谷。今からお前に、何故コイツがポッキーと呼ばれ

ているのか、その理由を見せる」

下谷 「？」

赤岩 「おいポッキー、早くしろ」

松原「……」

赤岩「この状況を打開する為だ。しっかりしろ」  
松原「……」

仕方なくチャックを降ろし（客席には見えない様に）  
「そこそとズボンの中を探し、物を出して下谷に向けて見せる松原。」

赤岩「見ろ下谷」

下谷「……（見る）」

下谷の目が見開き、みるみる驚愕の表情になっていく。

赤岩「どうだ」

下谷「……ぽっ……ぽっ……ぽっ……ぽっ……」

赤岩「ポッキーだろう」

下谷「うっ……うっ……ぶっ、ぎゃああゝゝゝっはははははははははははは……」

転げ回って爆笑する下谷。

下谷「ポッキーだ！ポッキーだあぎやはははははははははははははははははははははは……」

笑い転げて拳銃を手放す。  
その拳銃を松原が拾い、皆に向ける。

松原「殺してやるう！殺してやるお前らーぶっ殺してやるうー！」

と皆に向けて乱射する。

慌てふためいて身を伏せる一同。

舘川「落ち着け。ポッキー！」

峰野「やめるんだ。ポッキー」

赤岩「ポッキー！」

狩山「落ち着け。ポッキー！ いいか、よく聞くんのだ。男の価値はチンコの大ききさで決まるものではない！」

松原「お前が言うな。お前があ！」

と銃を乱射する。

舘川「いい加減にしろ。ポッキーっ！」

と松原に向けて拳銃を構える舘川。

その瞬間動きを止める松原。

松原「……」

舘川「いいか、もう遊びは終わりだ。その拳銃を捨てるんだ。まさかお前、俺にお前を撃たせはしないだろうな」

松原「……」

舘川「さあ早く、拳銃をそこへ置け」

松原「……」

観念した様にゆっくりと拳銃を置こうとする松原。

その時、さっきからブルブルと笑いを堪えていた下

谷が遂に我慢出来なくなり、ブツと噴出してしまふ。

下谷「ぶっ……くううっ……ふふふ……ぐはははははは……っ

ああっはははははは……」

腹を押さえ、笑いが止まらない下谷。

松原「ちくしょーっ、ちくしょーっ！」

と下谷に拳銃を向けて撃とうとした瞬間、鋭い銃声と共に館川の拳銃が火を吹き、松原はもんどり打って倒れる。

赤岩「ポッキーっ！」

峰野「ポッキー！」

狩山「ポッキーっ！」

と松原に駆け寄る赤岩と峰野と狩山。

松原を抱き起こす赤岩。

赤岩「ポッキー、しっかりしろ！」

峰野「ポッキー」

狩山「歓迎会は、歓迎会はどうなるんだあ」

苦渋の形相で側に来る館川。  
苦痛に顔を歪めて必死に首を振り、何か言おうとする松原。

松原「うっ……うっ……」

館川「なんだポッキー」

赤岩「何だ、言ってみろ」

松原「ほ……ほ……ポッキーって、呼ばないで下さ……い」

ガクッと事切れる松原。

赤岩「ポツ……（と言おうとして言葉を飲み込む）」

他の刑事たちの顔を見る赤岩。

同じく言葉が出せずに顔を見合わせる刑事たち。

考えていた峰野が何か思い付いたらしく、頷いて見せる。

峰野「パルキーっ！」

皆もそうだと頷きあって松原に呼びかける。

赤岩「パルキー！」

舘川「パルキー」

狩山「パルキーっ！」

死んでいた松原が痙攣を起こした様にブルブルと顔を上げる。

驚く一同。

松原は痙攣しながら両手を伸ばし、誰彼となくつかもうとする。

松原「そ……そ……そ……それも嫌だ、それも嫌だあ……」

ゾンビの様に不気味な動きで立ち上がり、赤岩たちを追い回す松原。

一同「わあ〜」

と驚いて逃げ出す。

赤岩「パルキーの方が大きいぞ」

追い回す松原と逃げ惑う刑事たち。

大混乱になる。

暗転。

おわり